

主体的に社会事象に問いかけ探究する子どもの育成を目指して

—第4学年 「岐阜県の伝統工芸品」を事例として—

可児市立春里小学校 浅野 光 俊
岐阜大学准教授 須本 良 夫

1. 主題設定の理由

(1) これまでの学びから

社会科を学ぶ意義は、「社会のしくみを認識し、その社会がどうあるべきなのかを考えること」にある。そのためは、子ども自らが問いを発見し、自ら探究していくことが大切である。だからこそ、教師が授業の主役になるのではなく、子どもが授業の主役とならねばならない。しかし、現在の社会科授業に共通していることを一言で表すと、「子どもが主体的に探究していない」ということである。その理由を3点挙げる。

① 子どもの疑問から生まれない学習課題

授業で扱われている学習課題は、教師が教科書に掲載されているものをそのまま取り上げたものである。それは子どもが真に探究したいもの、子どもたちにとって切実性のあるものではない。

② 探究的な学習課題となっていない

「どのような」という疑問詞は、調べた事実の暗記のみに終わる。調べて、交流すれば授業は終わってしまうので、子どもの思考は全く働かない。

③ 課題解決のための見通しや視点が無い

学習課題に「なぜ～か。」という探究的なものが設定されていても、なかなか解決できない。子どもが資料を用いて一人調べをしても、何をどう調べればいいのかさえわからない状態である。課題をどのようにして解決していくかという見通しや視点が全くない。

そこで、上記の問題点を改善すべく、子どもが主体的に「なぜ」と社会事象に問いかけ、学習課題を設定し、調べる見通しや視点をもって探究していく授業を具現化していきたいと考えるようになった。

(2) 教師の願う子どもの姿

社会科授業の中で、「主体的に問いかけ探究する子ども」を育てたい。それは、次の3つの条件を満たす子であると考えている。

① 出会った社会事象の事実を即座にとらえ、「なぜ～か」と問いかけ、学習課題を発見、設定することができる子

② 学習課題に対して、自分の経験にもとづく、根拠のある予想を設定することができる子

③ 習得した知識を活用し、予想にもとづく資料を用いて調べ、自分の頭で考えて説明することができる子

(3) 新学習指導要領から

平成20年8月に告示された小学校学習指導要領『小学校学習指導要領解説 社会編』（以下、解説編）には次の記述がある¹。

児童生徒が社会的事象に関する基礎的・基本的な知識、概念や技能を確実に習得し、それらを活用する力や課題を探究する力を身に付けていくために、各学校段階の特質に応じて、習得すべき知識、概念や技能を明確にするとともに、各種の資料を効果的に活用し、社会的事象の意味などを解釈したり事象の特色や事象間の関連を説明したりするなどの言語活動を重視している。

とりわけ注目すべきは、「基礎的・基本的な知識、概念や技能を確実に習得し、それらを活用する力や課題を探究する力を身に付けていく」ことである。「活用」とは「活用の場」において、子どもが行うものであり、その点で「主体的」につながるキーワードである。

また、第4学年における内容の改訂では、「自然環境、伝統や文化などの地域資源を保護・活用している地域」が新たに加わった。新しいキーワードや内容について、社会科授業の中でどのように具現化していくべきなのか、挑戦したいという思いがあり、テーマを決定した。

2. 研究仮説

仮説1

単元構成の中に、子どもにとって身近で課題意識を持てる題材を取り上げたり、社会的事象の「比較」を効果的にしたりすれば、子どもは自ら問いかけることができる。

「身近なもの」とは、親しみやすく親近感が持てるもの（心理的）、子どもが過去に体験したことがあるもの（体験的）、自分が行ったことがある場所や範囲に見られるもの（地理的）の3つの条件を満たすものである。五感を通して事実をとらえることができる「体験」や、子どもの生活経験の範囲の中にある社会的事象を取り上げたりすれば、子どもは意欲的に探究し、納得をとまなうかたちで社会を認識することができるのではないかと考えた。

また、事象と事象の「比較」を効果的に行えば、違いを発見することができる。その際に、「事象に違いが生じるのはどうしてか」という疑問が必然的に生まれるはずである。

仮説2

社会科学の法則でもある知識（概念）を習得し、それを活用する場を設ければ、学習課題に対する探究の見通しが明確になり、子どもは主体的に社会的事象を探究することができる。

概念とは、「どうして～か」に対する説明をすることができる、社会の法則であり、教室の中だけでなく社会に出ても活用可能な知識である。例えば、「たまねぎの値段が高騰したのはどうしてか」という疑問が生まれたとする。これについて、概念である「需要量と供給量の関係」を習得していれば、それを活用して「たまねぎの値段が高騰したのは、たまねぎが不作だったから」という説明が可能となる。

ただし、習得した概念の活用には、それを「活用する場」がなければ、演繹的に説明することはできない。これにより、学習課題に対する予想を立てることが可能となり、学習の見通しを持つことができる。そして、子どもは主体的に社会事象の探究ができるのではないかと考えた。

3. 研究内容

①社会的事象を主体的に探究できる単元内容および構成の工夫

身近な社会事象に対して、子ども自らが「どうして」という必然性のある学習課題が生まれるように単元で学習する内容や配列を工夫する。

②探究の見通しを持って調べ、考えることができる工夫

自分の探究の視点が明確になるように、課題解決への見通しを持たせる方法を工夫する。

(1) 研究内容

①社会的事象を主体的に探究できる単元内容および構成の工夫について

今回、研究対象となる単元の内容は、「岐阜県の伝統工芸品」である。この単元構成を考えるうえで、工夫したことは「概念の習得」と「扱う内容の配列や順序」である。まず、「概念の習得」について、伝統工芸品が各地でさかんにつくられているのは、近くで良質な原材料が調達できることに加え、それを加工するすぐれた技が代々継承されている点でどれも共通している。単元を通して、それらの知識を子どもが納得をとまなうかたちで習得できるように仕組む。

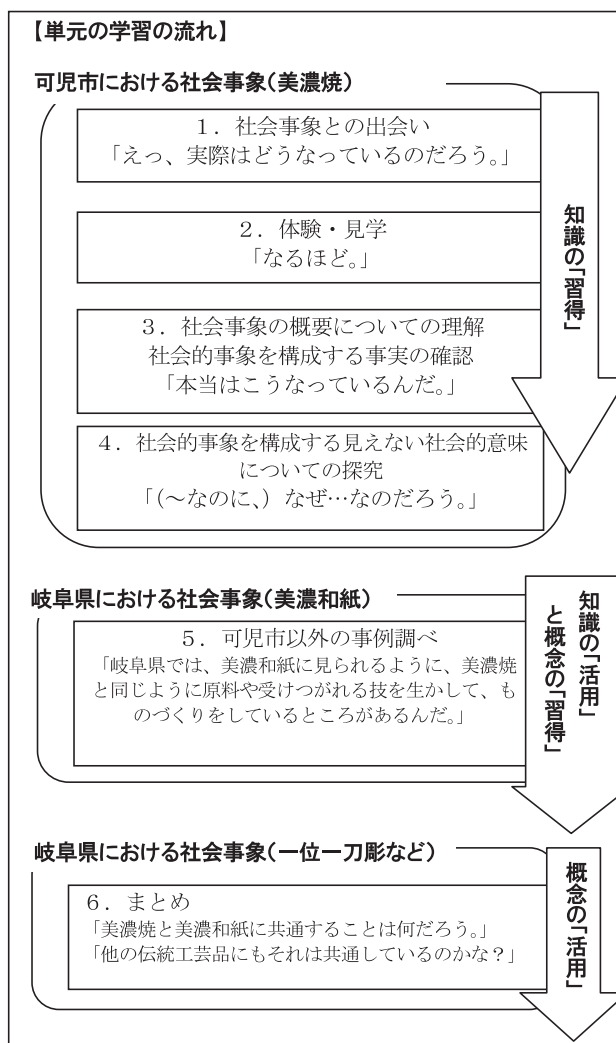
また、「扱う内容の配列や順序」については、解説編に示されているように、「自分たちの住んでいる市とは異なる地域」、つまりは、可児市外の事例を取り上げることになるⁱⁱ。しかし、岐阜県に見られる伝統工芸品の事例は、いずれも人々が身近な地域の自然環境や資源を活用して活動している点で共通している。そのため、地元近辺に県の特徴を示す典型的事例があるならば、それを入り口で扱う方が、子どもにとって身近であり、探究に切実性が生まれるという判断から、右に示す単元構成の流れを考えた。学校のある可児市から身近な場所にある美濃焼について学習して知識を習得した後に、それを活用して美濃和紙づくりを探究していく流れである。そこで、美濃焼と美濃和紙づくりに共通しているものを抽出すれば、概念を習得することができ、他の社会事象の説明において有効となる。

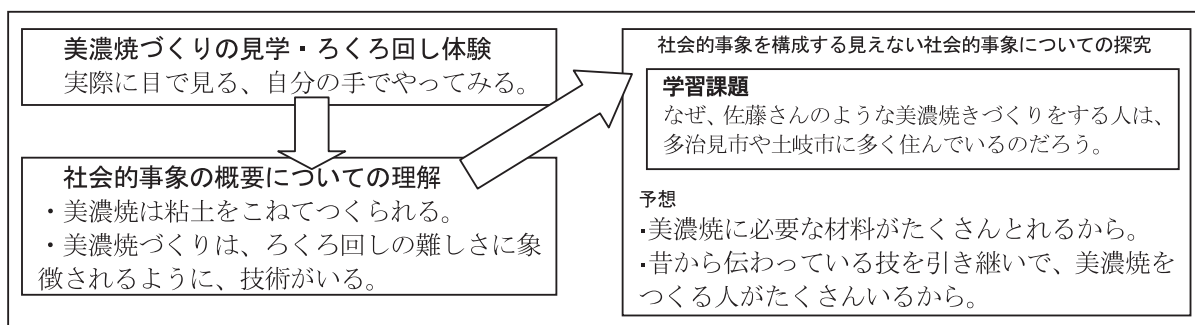
また、社会科で課題意識が生まれるのは、単元の導入時と、1単位時間（45分）の中である。自分たちの体験や生活経験、さらには、事象との比較から「（～なのに）、どうして…なのだろう。」という必然性のある学習課題が設定できるように、次の2つの工夫をする。1つは、単元導入時に、実物や本物に出会わせることによって生み出すものである。いま1つは、1単位時間の最初に示す資料をとらえやすい形で提示するものである。

②探究の見通しを持って調べ、考えることができる工夫について

認知心理学の知見によれば、物事を考えていくためには、その領域固有の知識を身につけておかねばならないⁱⁱⁱ。つまり、美濃焼について何も知らない子どもが、それに初めて触れて考えることは難しいことである。さら言えば、身につけたものを活用する機会がなければ、物事についてさらに深く考えることはないということでもある。そのために、体験を通して「学習内容（知識）を習得していく場面」、「習得した知識を活用する場の設定」の2つを設定する。

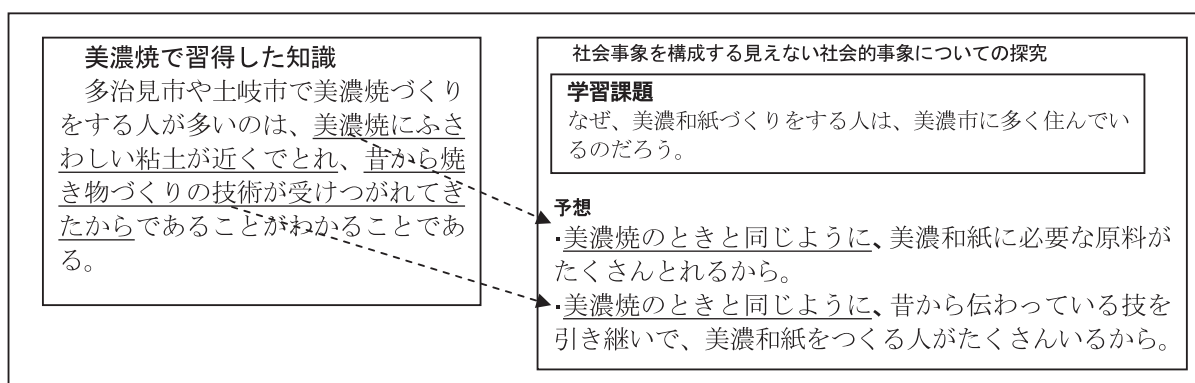
まず、「学習内容を習得していく場面」を【図1】に示す。





【図Ⅰ 学習内容を習得していく場面】

次に、美濃焼の学習で習得した知識が「活用できる場（美濃和紙の学習）」を【図Ⅱ】に示す。



【図Ⅱ 美濃焼の学習で習得した知識が「活用できる場（美濃和紙の学習）」】

4. 研究実践の内容

単元「岐阜県の伝統工芸品」の実践について、第1次「佐藤さんの美濃焼づくり（全8時間）」、第2次「美濃市の美濃和紙づくり（全4時間）」、第3次「岐阜県の伝統工芸品のまとめ（1時間）」の3つに分けて示す。

第1次 佐藤さんの美濃焼づくり（全8時間）

この小単元では、美濃焼を扱う。美濃焼は、可児市に近い、多治見市や土岐市を中心に現在もつくられている。調べを進めたところ、可児市在住の佐藤公一郎さんが美濃焼づくりをされているということで、この方に協力を依頼し、授業を展開することにした。

この単元のねらいは、美濃焼づくりが多治見市や土岐市を中心につくられている背景に、原料である粘土の調達や、名人から弟子あるいは親子間における技の継承があったことがわかることである。

第1時 佐藤さんの美濃焼づくり

課題：「佐藤さんがつくる美濃焼の学習計画を立てよう。」

本授業のねらいは、「佐藤さんがつくられた美濃焼の湯飲み」と「100円ショップに売られている湯のみ」を比較する活動を通して、「佐藤さんのような美しい焼き物はどのようにつくられるのか」という単元を貫く学習課題を設定することにある。

はじめに、「佐藤さんがつくられた美濃焼の湯飲み」と「100円ショップに売られている湯のみ」を提示し、見たり、触ったり、においをかいだりして気付いたことをノートにたくさん書くように指導した。すると、佐藤さんの美濃焼は、薄くて軽いこと、真ん中がへこんで持ちやすくなっていることなどが挙げられた。同時に、「佐藤さんは美濃焼をどのようにつくっているのか」という課題を立てることができた。また、佐藤さんの美濃焼づくりに関することで、知りたいことや調べたいことをノートに書く活動を行った。その結果、

美濃焼のつくり方に関するもの、美濃焼全般に関すること、など多くの疑問を出すことができた。

第2時 美濃焼ができるまで

課題：佐藤さんはどのように美濃焼をつくっているのだろう。

本授業のねらいは、美濃焼が作られる過程について、資料集を用いて調べる活動を通して、美濃焼の各工程の流れを知ることができることにある。第2時にこの授業を設定した理由は、後の佐藤さんによる出張授業にかかわって、工程をおさえておいた方が、佐藤さんの話の内容も理解しやすいと考えたためである。

授業の最初に、佐藤さんが作られた美濃焼を提示し、これができるためには何が必要なのか考えさせた。つまり、これは調べる見通しを持つことである。子どもたちからは、火や土といった意見が出てきた。そして、資料集を参考にしながら、完成品となるまでの過程を調べてまとめる学習を行った。つまりは、美濃焼は、土練り、成形、素焼き、上薬、本焼きの流れでつくられるということである。授業を通して、美濃焼をつくるには、いくつかの工程があることがわかった。それだけでなく、佐藤さんがすべての工程を一人でやっておられることを知り、つくることの苦労や努力に気付く子どもの姿もあった。

第3時 ろくろ回し体験

課題：ろくろ回し体験をしてみよう。

ここから第5時にかけて、学級の誰もが美濃焼づくりを追究していくための共通理解を図るために、体験的な学習を行った。本時のねらいは、土ねりや成形（形作り）をする活動を通して、美濃焼づくりの難しさや技の必要性に気付くことであった。同時に、未だ美濃焼について興味や関心が持てていない子どもに対して、体験的に「身近なもの」ととらえさせることを目的とした。

目標は、第1時に見た、湯飲みの形を自分一人の手でつくることである。学級のほとんどの子どもが土練りやろくろ回し体験が初めてということもあり、やり始めた直後は興奮がとまらなかったほどである。土練りは、うまく土とかかわることができず、ぐちゃぐちゃになったり、粘土が手にべったり付いたり、子ども一人の力ではどうにもならない状態であった。また、ろくろ回しでは、セットした土に親指を入れようとした瞬間に崩れてしまったり、土の重心をしっかりと安定させたりすることすら困難な状態であった。一人として、土練り、ろくろ回しを通して、第1時にみたようなかたちの湯のみにはならなかった。子どもたちは次のような感想を残している。



[子どものノートから]

- ・ 見ているとかんたんそうだけれど、やってみると意外にむずかしいです。ねんどはねちゃねちゃで、回転の速さのちょうせつがむずかしかったです。
- ・ ねん土をねるときに、ねん土が、手やいろいろなところについたのてたいへんでした。実さいにつくるのも大変でした。
- ・ ろくろ回しは大変でした。形がくずれたり、土がとんでいったりします。むずかしかったです。佐藤さんは、きっと何回も練習したんだなと思いました。

第4、5時 佐藤さん出前授業

課題：佐藤さんはどのように美濃焼をつくるのか見学しよう。

2単位時間にわたって、美濃焼の伝統工芸士である佐藤公一郎さんをお招きし、出前授業をお願いした。内容は、「美濃焼ができるまで」、「土練り（演示）」、「ろくろ回し（演示）」、「美濃焼の歴史と私たちのかかわり」、「質疑応答」であった。事前の打ち合わせの中で、佐藤さんには、本単元のメインに来る学習課題「どうして美濃焼づくりが多治見や土岐を中心にさかんにつくられているのか」に関しては言及しないようお願いしてあった。

子どもたちにこの出前授業の中で、大切にすべきこととして、次の2点を指導した。一つは、美濃焼の工程である「土練り」や「成形（ろくろ回し）」を佐藤さんがどのようにやって見せるのかということである。ここで、自分たちが前時にやったことと比べてみてどうなのか着目するように指示した。今一つは、第1時で自分たちが学習計画として出した疑問を少しでも解決すべく質問をするように指示した。

案の定、子どもたちは佐藤さんの技に圧倒され、出る技出る技に驚きや感動の声が聞かれた。「土練り」では、手際よく土を練る様子や菊練りの美しさに、「成形（ろくろ回し）」では、美しい形の器や湯飲み茶碗の形ができることに見とれる子どもが多かった。

質問では、佐藤さんと美濃焼のかかわりに関して、工夫していることや、美濃焼づくりをどのように覚えたのか、むずかしいことなど、たくさんの回答を得ることができた。



第6時 出前授業のまとめ

課題：佐藤さんから学んだことをまとめよう。

第3時～第5時で五感を働かせて体得した内容について、VTRを用いて振り返る時間を通して、授業で使える知識となるようにまとめる時間を設けた。そして、この時間の究極のねらいは、佐藤さんと自分たちの土練りやろくろ回しを比較する活動を通して、違いが見られたのは、技と土が違ったからであるということに気付くことである。これが美濃焼づくりには絶対に欠かせない条件となる。

佐藤さんの技を再度見たり、質問をしていただいた回答の中で特に注目し値することを改めて確認したりした。特に、佐藤さんが美濃焼をどのように覚えたのか、そして、工夫していることの2つを徹底しておさえた。前者に対する回答は、「大学卒業後、2年間、多治見に修行に行ったが、それだけでは身に付かなかったので、家の美濃焼の仕事を手伝いながら覚えた。1人前になるには、最低でも10年はかかる。」というものであった。特に、「多治見という場所」、「修行」という言葉を強調する形でおさえた。そして、後者に対する回答は、「いくつかある中でむずかしいことは、軽いものをつくること、つまり、薄くつくることで、技がいるから」というものであった。ここでは「技」という言葉を強調しておさえた。

そして、最後に自分たちと佐藤さんが同じ人間にもかかわらず、佐藤さんは美しいものができて、自分たちはできなかったという差が生じたのはなぜか考えた。経験や技などいろいろな意見が出てきた。出てこなかったのは粘土である。そのため、自分たちが使ったものと佐藤さんが使っていた粘土の色を比べさせ、使っている粘土が違うことをおさえた。

第7時 土岐市や多治見市に美濃焼づくりをする人が多い理由

課題：なぜ、佐藤さんのような美濃焼づくりをする人は、多治見市や土岐市に多いのだろう。

本時のねらいは、「美濃焼の原材料である粘土が取れる場所」、「受けつがれる技 名人表」、「佐藤さんの話」

の資料を調べる活動を通して、多治見市や土岐市で美濃焼づくりをする人が多いのは、美濃焼にふさわしい粘土が近くでとれ、昔から焼き物づくりの技術が受けつがれてきたからであることがわかることである。

授業の導入では、右の【図Ⅲ】に示すように、佐藤さんと同じように美濃焼づくりを行う人を岐阜県の白地図にドット（●）で示し、子どもたちに提示した。多治見市、土岐市に集中していることをとらえさせるためである。岐阜県の中で、他の地域に比較して一部にドットが集中していることをとらえることができれば、「(他の地域には美濃焼づくりをしている人がいないのに)、なぜ多治見市や土岐市には美濃焼づくりをしている人が集中しているのだろう。」という課題発見につながるはずだと考えた。

下に示す〔授業記録〕からもわかるように、最初のC2の発言では事実を的確にとらえられていることがわかる。しかし、C3が学習課題をとらえる際に、考えが飛躍してしまったため、スムーズに学習課題を成立させることはできなかった。これは、子どもたちの学習経験の不足が起因しているものと考えられる。

予想の段階では、C6やC7が体験で学んだことをもとに予想を発表している点（下線）には注目したい。単元構成の内容に体験を取り入れた成果が生きているものと判断することができる。しかし、粘土に関する予想がなかなか出てこなかった。これについては、教室の側面に掲示した資料を見て、学習内容を振り返る時間をとることで、C9やC10の発言（下線）でようやく出てきた。ここでも学習経験が生きていることは考察できる。



【図Ⅲ 導入での提示資料】

〔授業記録〕

(図Ⅲを示して子どもの発言を取り上げる場面より)

C1：佐藤さんは、美濃焼づくりをしている人と近くに住んでいます。

C2：多治見市のほうで、美濃焼をつくっている人がいて、可児市には一人しかいないので疑問に思います。

C3：可児市には一人しか住んでいないけれど、多治見のほうにたくさん住んでいるのか疑問に思うので、それを今日の学習にしたらいいと思います。どうですか？

T：オッケー。ちなみに、多治見以外にも多いところがあると思うけれど、どこやと思う？

C：わからない！土岐！

T：今日は、佐藤さんのような美濃焼づくりをしている人が、どうして多治見市や土岐市に集中しているのか、これを今日の学習課題にしたいと思います。課題を書きます。

T：はい、予想を聞いてみたいと思います。どう思いますか。

C4：そこのほうが、美濃焼づくりをする人が多いからだと思います。

C5：美濃焼を最初につくった場所だからだと思います。

C6：佐藤さんはこの前、多治見市に修行に行ったといっていたので、多治見市のほうが修行しやすいから

C7：多治見市に修行に行ったといっていたので、多治見市に名人がたくさんいると思います。

C8：多治見市に修行のための名人がたくさんいるからだと思います。

T：(側面掲示を指しながら)よく思い出してごらん。何かこれ関係するんじゃないかなということないかな。なんかこうだから人がいっぱいおるんじゃないかな。

C9：いい粘土がとれるからだと思います。

C10：粘土がいっぱいとれるからだと思います。

検証の段階では、予想にもとづく資料を用いて、個人および全体での探究活動を行った。自分たちが立てた予想がどうなのか、見通しを持った資料の一人読みができた。

第2次 美濃市の美濃和紙（全4時間）

岐阜県の地場産業で伝統工芸品として認められているものは、春慶塗、一位一刀彫、岐阜提灯、美濃和紙、そして、先に取り上げた美濃焼の五品目である。今回は、下記に示す2つの理由から、美濃和紙を取り上げることにした。

一つ目は、最初に示した「解説編」の記述による^{iv}。美濃市は、岐阜県の中西部に位置し、土地がやや高く、清流板取川が流れる。そこでは、自然環境を利用した伝統的な地場産業である美濃和紙が有名であることから、可児市とは自然環境や伝統文化、産業が異なるからである。

今一つは、美濃市でつくられる美濃和紙こそ、岐阜県が誇る名産品だからである。美濃和紙は、美しく丈夫な紙ということで、昔から全国でその質が認められてきた一品である。

美濃和紙を学習することのねらいは、美濃和紙づくりが美濃市で行われている背景に、原料であるこうぞの調達や、名人から弟子あるいは親子間における技の継承があったこと、それに加えて美濃市の美しい水資源（地下水、板取川）があることがわかることである。ここでは、美濃和紙について学習する過程の中で、美濃焼で習得してきた原料と技の継承に関する知識が活用されるとともに、それらの2つの知識が帰納的に結びつき、概念化（一般化）されることとなる。

第1時 美濃市の美濃和紙

課題：印刷紙と美濃和紙にはどんな違いがあるのだろう。

ねらいは、印刷紙と美濃和紙を比べる活動を通して、美濃和紙は丈夫で美しい紙であることがわかることにある。同時に、美濃和紙がどのようにつくられているのかという単元を貫く学習課題を設定する。

授業の最初に、学校の通信等で用いられる印刷紙と、美濃市の手すき和紙職人がすいた美濃和紙を比較する活動を取り入れた。そして、におったり、さわったり、見たりする活動をして、気付いたことをノートにまとめるように指導した。すると、美濃和紙は、障子紙みたいだ、繊維がある、くさい、光に透けて見える、といった意見がでた。さらに、美濃和紙の切りくずを配り、印刷紙とどちらが簡単に破ることができるのか、予想してから実践した。すると、美濃和紙は簡単には破れないことがわかった。このことから、「丈夫で美しい美濃和紙がどのようにつくられているのか」という学習課題を設定できた。

第2時 美濃和紙ができるまで

ねらいは、美濃和紙ができる過程を知ること、美濃和紙ができるために必要な要素である原料（こうぞ）、きれいな水、技の大切さに気付くことができることである。

美濃和紙の里会館（美濃市）から提供いただいたDVDを視聴し、美濃和紙ができるまでの流れを全体で確認した。そして、「もし、これがなかったらきれいな美濃和紙はできない。」ということで、美濃和紙づくりに欠かせないものを考えた。そして、必要なものとして、原料であるこうぞ、きれいな水、技の3つをまとめた。

第3時 美濃市で美濃和紙が作られる理由

ねらいは、「美濃和紙の原料」、「山や川にかこまれる美濃紙の自然」、「『美濃和紙の里』の館長さんの話」の資料を読み取る活動を通して、美濃和紙づくりをする人が、原料であるこうぞの調達や、名人から弟子あるいは親子間における技の継承があったこと、それに加えて美濃市の美しい水資源（地下水、板取川）があることがわかることである。また、第1次第7時に習得した知識を活用して、学習課題に対する予想を立てることができることもねらいにあった。つまり、本時は、「活用の場」ということになる。

まず、岐阜県で手すき和紙づくりをしているのは、飛騨市河合村と美濃市しかないことを知る。その上で、河合村と美濃市における手すき和紙人口を比較すると、美濃市のほうが断然多いことがわかる。そこで、学習課題「どうして美濃和紙づくりをする人は、美濃市に多いのだろう。」という学習課題を設定した。

〔授業記録〕

T : それでは予想を発表してください。

C 1 : 原料などが美濃市でとれるからだと思います。

C 2 : 美濃焼のときと同じで、こうぞやトロロアオイが近くでたくさん取れる。

C 3 : 美濃市には、飛騨市よりもやっている人が多いからだと思います。

C 4 : 美濃市にはきれいな川が近くにあるから。

C 5 : きれいな川が美濃市には多いからだと思います。

C 6 : 美濃市にはきれいな川があるからだと思います。

C 7 : 近くにきれいな川がたくさんあったり、原料がたくさん取れるから

C 8 : 親や師匠がたくさんいるからだと思います。

C 9 : 名人がいるからだと思います。

C 10 : 一番最初に考えた人から弟子へ、子へと続いていったからだと思います。

〔授業記録〕からもわかるように、学習課題に対して予想を立てる段階では、原料であるこうぞ、さらには技という考えがスムーズな形で多く出た。きれいな川があるからという意見も出た。C 2 の発言（下線）に見られるように、「美濃焼のときと同じで」という言葉に象徴されるように、習得した知識がうまく活用できたものと考えることができる。子どものノートでも、「美濃焼で学習したことと同じように」という記述が見られた。

その結果、予想にもとづく資料を手がかりに、予想を検証することができた。読み取った内容を美濃焼の学習の時より、ミクロな視点で書き込む子どもの姿があった。最終的に、多くの子どもがねらいである知識の習得をはかることができた。

第3次 岐阜県の伝統工芸品のまとめ（1時間）

この時間のねらいは、岐阜県の伝統工芸品のどれもが、地域の原材料を用いて、受けつがれてきた技を用いてつくられていることがわかることである。これは社会事象の一般性を示す、いわば概念である。先に示した、飛騨春慶（高山市）、岐阜提灯（岐阜市）、一位一刀彫（高山市）、さらには、授業で探究してきた美濃焼（土岐市、多治見市）や美濃和紙（美濃市）が各地でさかんに生産されている理由は、いずれも良質な原料が調達しやすく、その上、つくる技術が継承されてきている点で共通している。そのため、美濃焼と美濃和紙の学習における共通点を抽出すれば、概念を習得することになり、他の社会事象を説明することができるわけである。

授業では、美濃焼と美濃和紙で、つくる人が岐阜県の一部に集中していた理由を確認した。そして、双方に共通していることを考えてワークシートにまとめ、交流した。子どもの言葉では、「近くで原料が取れること」、「昔から技が受けつがれていること」が出てきた。

最後に、一位一刀彫、岐阜提灯、飛騨春慶の写真を見せ、これらが岐阜県の各地でさかんにつくられてきた理由を考える時間を設けた。すると、例えば一位一刀彫ならば、それが木でできていることを写真から読み取り、「いい木がとれるから」、「それをつくるための技があるから」という意見が出てきた。概念を習得したからこそ、各伝統工芸品がその地でさかんにつくられている理由を説明できるのではないだろうか。

5. 成果と課題

仮説1について

単元構成の中に、子どもにとって身近で課題意識を持てる題材を取り上げたり、社会的事象の「比較」を効果的にしたりすれば、子どもは自ら問いかけることができる。

- 「身近なもの」を取り上げたり、「身近なもの」ととらえさせたりすることにより、子どもは社会事象に対して、興味や関心を持つことができた。同時に、いくつかの場面で、比較をすることにより違いを発見し、「どのようにしてつくられるのか」や「どうして」といった課題を発見し、こだわって考えることができた。
- 課題設定に関しては、資料にある事実を的確に把握し、読み取ることができた。しかし、それを学習課題として設定すること、つまり、課題を認識することに弱さが見られた。これは教師の資料提示の仕方、および、子どもが課題を認識する過程に弱さがあったことによるものと考えられる。教師と子どもの意識のズレともいえる。美濃焼の学習過程で課題となったことを明らかにし、美濃和紙につなげるなど、指導と評価の一体化を目指していく必要がある。

仮説2について

社会科学の法則でもある知識（概念）を習得し、それを活用する場を設ければ、学習課題に対する探究の見通しが明確になり、子どもは主体的に社会的事象を探究することができる。

- 本単元「岐阜県の伝統工芸品」の概念は、「原料の活用」と「技の継承」の二つである。美濃焼では体験で習得した知識を生かして、また、美濃和紙では美濃焼で習得した知識を活用して、見通しを持った探究をすることができた。特に、美濃和紙の学習（美濃焼で習得した知識を活用する場）で、学習課題に対する予想をスムーズに立てることができ、美濃焼の学習内容や知識が習得できていたということが証明された。その結果、美濃和紙の学習では、子どもは美濃焼の学習よりも、ミクロな視点に着目し、主体的に社会事象の探究をすることができた。
- 社会科の学習が教室の中だけで閉ざされてしまう点が課題である。この点で、子どもは授業の主役になりきっていない。子どもが習得した概念を持って、自分で事象を説明することができてこそ、真に「主体的な」探究になるのではないかと考える。

6. おわりに

本研究を通して、「岐阜県の伝統工芸品」を探究していくための手立てとして大切にしていきたいことは、次の3点である。

- (1) 子どもたちにとって「身近」な社会的事象を取り上げ、探究していくこと。身近なものから遠くのもの（自分たちの住む市とは異なる地域）へ同心円状に広げていくこと。
- (2) 身近な社会的事象の学習では、単元で探究していく知識（概念）、および、自分たちとは異なる市の学習をする際に探究の手がかりとなる知識の習得をねらいとすること。これが、「活用の場」で生かされ、習得した知識の共通点を抽出していくことにより、それが概念化されていく。その際に、初めて、伝統工芸品の特色がわかることになる。
- (3) 今回の実践では、内容を凝視すると「伝統工芸品を保護する視点」が欠落していた。伝統工芸品を保護する値打ちがあること、さらには、今現在おかれている現状を認識したうえで、他にも自分たちが守っていくものについて考えていくことも含めなければならない。

〔引用文献一覧〕

- ⁱ 文部科学省『小学校学習指導要領解説 社会編』東洋館出版社、2009年8月、p.3
- ⁱⁱ 同上書、p.47
- ⁱⁱⁱ 波多野誼余夫編『認知心理学5 学習と発達』東京大学出版会、1996年、p.60
- ^{iv} 文部科学省『小学校学習指導要領解説 社会編』東洋館出版社、2009年8月、p.47